東洋史研究
第四十七巻　第三號　昭和六十三年十二月發行

元行沖とその「釋疑」をめぐって

吉川忠夫

はじめに
一　元行沖と劉知幾
二　「釋疑」
三　『類禮』義疏と『大唐開元禮』
結び

はじめに

唐の玄宗時代の人である元行沖の「釋疑」と題された文章が人びとに記憶されるのは、何よりもそのなかに、つぎの言葉があることによってではあるまいか。「寧ろ孔聖の誤りを道うとも、鄭服の非を聞くことを諱る」。鄭服とは鄭玄と服虔。もっともこの言葉は、王劭の「史論」からの引用として、つぎのごとき文脈のなかに置かれているのである。王劭は北齊、隋の人（『隋書』巻六九、『北史』巻三五）。讖識を多用する異色の學者として知られるが、『齊誌』、『齊書』、『讀書

記』等の著作があったといい、そのいずれかからの引用であろう。「……故に王劭の史論に曰く、魏晉は浮華にして古道は夷替し、王肅、杜預に洎んで更に門戸を開く。載を歴ること三百、士大夫は章句を爲むるを恥とするも、唯だ草野生は專經を以て自ら許し、異義を究覽して其の善に擇從す能わず。徒らに康成（鄭玄）を父とし、子愼（服虔）を兄とせんと欲し、寧ろ孔聖の誤りを道うとも、鄭服の非を聞くことを諱る。然らば鄭服に於いては甚だ憒憒たり、鄭服の外は皆な讎なり」。

均衡のとれた敎養人である士大夫はさておき、經學を專門とするところの草野生、すなわち田舍學者は、廣い視野に立って妥當な解釋に適從することを知らず、自分が敎えこまれた章句の學を後生大事にかかえこみ、その結果、聖人孔子の經書の本義それ自體よりもむしろ鄭玄や服虔の注釋が尊重される。そのような本末顚倒の現象が、草野生にたいする揶揄の氣持をこめつついささか大仰に述べられているのである。

鄭玄や服虔の後漢時代にはじまり、王肅や杜預の魏晉、さらに王劭の隋、元行沖の唐の時代には、さまざまの古典にたいする注釋が書きつがれ、中國學術史上に顯著な特色を印した。元行沖も、實はそもそも魏の孫炎が『禮記』を改編して作った新らしいテキスト、そしてそれを襲った唐初の魏徵の『類禮』の注をさらに敷衍する義疏を撰述しながら、用いられるところとはならず、その憤懣を語るべく「釋疑」の文章を書いたのであった。

一　元行沖と劉知幾

元行沖、名は澹。字をもって行なわれた。『舊唐書』巻一〇二、『新唐書』巻二〇〇儒學傳下に立傳され、「釋疑」もそこに收められている。永徽四年（六五三）―開元十七年（七二九）。開元初の學者として一家を成し、『史通』の著者劉知幾の心友の一人であった。『史通』自敍篇につぎのようにいう。「年の以に而立を過ぎるに及んで、言悟は日に多きも、常に時に同好の與に言う可き者無きを恨みとす。維り東海の徐堅、晚に之れと遇い、相い得て甚だ歡ぶ。……復た永城の朱

敬則、沛國の劉允濟、義興の薛謙光、河南の元行沖、陳留の吳兢、壽春の裴懐古有り。亦た言議を以て許され、道術もて相い知り、所有る権揚は懐抱を盡くすを得たり。毎に云わく、德は孤ならず、必ず鄰り有り、四海の内、我れを知る者は數子に過ぎざるのみ、と」。元行沖が「釋疑」の文章を書いたように、劉知幾も『史通』にたいする世人の批判への辯明として「釋蒙」の文章を書いたというが（同上）、それだけではなく、元行沖の學問と劉知幾の學問とのあいだには兩者を結ぶ線索が求められないではない。すなわち、北魏の常山王素連の後である元行沖が、北魏の編年史がないのを恨みとして『魏典』三十卷を撰述し、「事は詳らかにして文は簡」なるをもって學者の稱贊をうけたというのは、劉知幾が魏收の『魏書』を穢史とよんで貶譏するのに刺激されてのことではなかったか。(1) もっとも、元行沖の『魏典』と魏收の『魏書』は、一方は編年體、一方は紀傳體の史書のちがいがあり、また『魏典』が『魏書』の記事をどのように改めたのか、その詳細は確かめようがない。ただ一つ確認できるのは、『魏書』卷九六僭晉司馬叡傳の司馬叡、すなわち東晉の元帝の出生に關する記事をめぐっての問題である。

魏收の『魏書』の記すところによれば、司馬叡は實は琅邪王覲の妃である母親の夏侯氏が小姓の牛金と私通して生まれた子であったのだが、司馬氏の姓を冒し、覲の子とされたのだという。魏收のこの記事がそもそも沈約の『晉書』の說をうけたものであることは、『史通』雜說中篇に指摘がある。「近者、沈約の晉書は喜んで奇說を造り、元帝は牛金の子なりと稱して以て牛繼馬後の徵に應ぜしむ。鄴中の學者の王劭と宋孝王、之れを言うこと詳らかなり。而るに魏收は深く南國を嫉み、其の短を書せんと幸い、司馬叡傳を著わすに遂に休文（沈約）の言う所を具錄す」。また採撰篇にも、「沈氏の著書は好んで先代を誣い、晉に於いては則ち故さらに奇說を造り、宋に在りては則ち多く謗言を出だす。前史の載する所、已に其の謬りを譏れり。而るに魏收は北朝に黨附して尤だ南國を苦しとし、其の詭妄を承け、重ねて以て諸に加え、遂に馬叡は牛金に出ず……と云う」と記したうえ、そこの原注に王劭と宋孝王の說を引いてつぎのようにいう。「王劭曰く、沈約の晉書は奇說を造りて云わく、瑯琊國の姓牛なる者、夏侯妃と私通して中宗（元帝）を生むと。因って遠く宣帝

が毒酒を以て牛金を殺すを敍し、其の狀を符證す。(2) 收は此の言を承け、乃ち云わく、司馬叡は晉將牛金の子なりと。宋孝王曰く、收は叡を以て金の子と爲すも、其の年を計るに全く相い干わらず。案ずるに前史すら尚お此の如く誤る、況んや後史の編錄する者をや」。

「牛繼馬後の徵」とは、曹魏の明帝の時、河西の柳谷に「牛繼馬後」の文字のある瑞石が現われたというのであるが、ところで元行沖の『魏典』は魏收の『魏書』の說を退けて、牛金の子が晉室司馬氏を繼ぐことではなく、北魏の昭成帝の名は犍、その犍が晉を繼いで受命したことこそが、「牛繼馬後」に託された意味であると考え、「謠讖を考校」のうえ、特に論を著わしてそのことを明らかにしたという。これもまた牽強附會の奇說とすべきであって、劉知幾が贊成したかどうかは疑問としなければならぬ。しかしすくなくとも、「牛繼馬後」を司馬叡傳說に結びつける魏收の說を退ける點において、二人は一致している。とともに、魏收の說を退けるにあたって劉知幾は王劭を一つの論據に用いており、これを一事として、劉知幾の王劭にたいする評價はたかい。時には魏收との比較のもとにたかく評價していることに注目されるのであって、(3) とするならば、「釋疑」が王劭の「史論」を引用するのもまったくの恣意にもとづく引用ではないのかも知れぬ。王劭にたいする評價を、元行沖も劉知幾とともに共有したのではないか。「牛繼馬後」に關してわずかにわれわれに傳えられるところの謠讖にたいする元行沖の興味、それは王劭にあってはまぎれもなく顯著に存在した。

『魏典』は私撰の史書であったが、やがて太子賓客・弘文館學士に進んだ元行沖は、麗正殿書院における四部書の校寫整理の指揮にあたり、開元九年（七二一）、『群書四錄』二百卷を奏上した。(4) ついで翌開元十年（七二二）の六月に玄宗の『孝經』注、いわゆる御注孝經が完成すると（『舊唐書』卷八玄宗本紀）、特に命を受けてその疏義を撰述する名譽をかたじけなくする。この時にあたって『孝經』の御注とその疏義が著わされた背景には、つぎのことが考えられるであろう。

これより先、開元七年（七一九）の三月、從來行なわれている『孝經』鄭氏注にあわせて孔氏注を、『老子』河上公注

にあわせて王弼注を明經者に習讀させてはどうか、またあらたに『子夏易傳』を帖經に用いてはどうか、その可否について奏聞せよ、との詔が下った。これをうけてまず意見を具申したのが太子左庶子の劉子玄、すなわち他ならぬ劉知幾であり、『孝經』のいわゆる鄭氏注が鄭玄の注ではないことの十二の證據を列擧したうえ、「孔を行ない鄭を廢すること、義に於いて允れりと爲す」と述べ、また『老子』については、河上公注を退けて王弼注を推し、『子夏易傳』については、それを僞託であるとして退けた。この意見を禮部に提出するにあたって、劉知幾が、「臣は才、下劣なりと雖も、學は實に優長なり。竊かに自ら不遜にも以爲えらく、近古已來、未だ之れ有らざるなり」と述べ、「今の庸儒は淺識、聞見は周ねからず。與に共に成す可きも、與に始めを慮り難し」と述べているのは、かれの自信のほどを示す。

劉知幾の意見が提出されると、中書門下から、「子玄は博識、誠に則ち純儒なるも、全く衆家を非とするは亦た則ち未だ可ならず。……望むらくは並びに所司に付し、諸儒をして子玄と對質定詳せしめん」との上奏があり、つづいて禮部から國子博士の司馬貞、太學博士の郄嘗通等十人の意見にもとづく奏議が行なわれた。司馬貞は『史記索隱』の著者である。司馬貞等も『子夏易傳』は退けたけれども、『孝經』の孔鄭二注、『老子』の王河二注はともに行用すべきことを主張し、けっきょく結論として、五月五日、司馬貞等の意見にそったつぎの詔が下った。「閒者、諸儒の傳うる所は頗る通義に乖い、孔學に敎き者は鄭門の息滅を冀い、今文を尙ぶ者は古傳を指して誣僞と爲す。豈に朝廷の並びに書府に列して以て儒術を廣めんとするの心ならんや。……其れ河、鄭の二家は舊に仍って行用せしむ可し。王、孔の註する所は傳習する者希しければ、宜しく繼絶の典を存し、頗る奬飾を加うべし。子夏傳は逸篇既に廣ければ、前に帖易せしめんとする者は停めん」(5)。

劉知幾の意見が採擇されるところとならなかったのは、宰相の宋璟が反對し、司馬貞等がその意に阿ねったからであるというが(6)、そのことはともかくとして、『孝經』孔氏注、すなわちいわゆる古文孝經孔安國傳の來歷を劉知幾はつぎのように述べている。「古文孝經孔傳の如き、本と孔氏の壁中より出ず。語は甚だ詳正、商榷を俟つ無し。而るに曠代亡逸し、

復た流行せず。隋の開皇十四年に至って、侍書學生の王孝逸は京市の陳人の處に於いて一本を買得し、著作郎の王劭に送與す。（王劭は）以て河閒の劉炫に示し、仍お較定せしむ。(7) 而るに此の書は更に兼本無く、依憑す可きこと難ければ、炫は輒ち所見を以て意に率いて刊改し、因って古文孝經稽疑一篇を著わす」。ここにも王劭が登場することに注目したい。ところで『隋書』經籍志には、「古文孝經一卷、孔安國傳」を著錄し、その後に、「梁末に亡逸す。今ま疑うらくは古本に非ず」と疑いを存したうえ、さらにその小序にいう。「梁代、安國及び鄭氏の二家は並びに國學に立つるも、安國の本は梁の亂に亡ぶ。陳及び周、齊は唯だ鄭氏のみを傳う。隋に至って、祕書監の王劭は京師に於いて孔傳を訪得し、河閒の劉炫に送至す。炫は因って其の得喪を序し、其の議疏を述べ、人閒に講じ、漸く朝廷に聞こゆ。後ち遂に令に著け、鄭氏と並立せしむ。儒者は諠諠として皆な云わく、炫自ら之れを作り、孔の舊本には非ず、而して祕府又た先に其の書無しと」。劉炫が「其の得喪を序し」たというのが『古文孝經稽疑』であり、「其の議疏を述べ」たというのが、隋志に「千（古）文孝經述義五卷、劉炫撰」として著錄するものであろう。一方、司馬貞等の古文孝經に關する意見はつぎのごとくである。「其の古文二十二章、(8) ……中國遂に其の本を亡う。近儒は古學を崇めんと欲し、妄りに此の傳を作って孔氏を假稱し、輒ち穿鑿改更し、閨門の一章を僞作す。劉炫は詭隨し、妄りに其の善を稱す……」。

かく古文孝經孔氏傳は、ことあたらしく論ずるまでもなく聚訟の府の書物なのである。それが再發見されるに至った經緯は、南齊の姚方興なる人物が亡われていた古文尚書舜典篇を大航頭で買得して獻上したという話と、どこか同工異曲である（『經典釋文』序錄、『尚書』堯典篇正義）。またそれに深くかかわっている劉炫は『連山易』や『魯史記』等百餘卷を僞作したと傳えられる人物なのだが（『隋書』本傳）、ともかく『孝經』の今文鄭氏注と古文孔氏注とをめぐっての議論が開元七年にあり、從って開元十年の御注孝經は、三年前の議論をふまえたうえで、王朝としての統一的な解釋を示すねらいがあったのにちがいない。玄宗の「孝經序」にはつぎのように述べられている。「近ごろ孝經の舊注を觀るに、躊躇尤も甚し。跡づけて相い祖述するに至っては殆んど且に百家ならんとし、業として擅ら專門とするものすら猶お將に十室ならん

とす。升堂を希う者は必ず自ら戸牖を開き、逸駕を攀く者は必ず殊なれる軌轍を騁す。是を以て道は小成に隱され、言は浮僞に隱さる。且つ傳は通經を以て義と爲し、義は必當を以て主と爲す。至當は一に歸し、精義は二無し。安んぞ其の繁蕪を翦りて其の樞要を撮らざるを得んや。韋昭と王肅は先儒の領袖なり。虞翻と劉邵は抑も又た焉に次ぐ。劉炫は安國の本を明らかにし、陸澄は康成の注を譏る。理に在いて或いは當れば、何ぞ必ずしも人を求めんや。今ま故に特に六家（韋昭、王肅、虞翻、劉邵、劉炫、陸澄）の異同を擧げ、五經の旨趣を會す……」。かく玄宗注は、何よりも「傳は通經を以て義と爲し、義は必當を以て主と爲し」、「理に在いて或いは當れば、何ぞ必ずしも人を求めん」ことを立場とするものである。いわば、經義の疏通を目的として、折衷主義を立場とするものである。孔鄭兩家を行用するというのが開元七年の『孝經』をめぐる議論の結論であったが、玄宗注はより廣い立場に立っての折衷を企圖したものであったといってよいであろう。劉知幾の意見は退けられ、かれの死の翌年に完成した玄宗注、それがもとづいたのはあくまで今文テキストではあったけれども、玄宗の序に「劉炫は安國の本を明らかにし、陸澄は康成の注を譏る」というのは、ここに至って劉知幾の意見がおおいに活かされたことをものがたっている。(9)

さて玄宗の「孝經序」は、注は簡略を宗とし、闕けたところは疏に讓ることを、「具載すれば則ち文は繁、之れを略すれば又た義は闕く。今ま疏に存して用って廣く發揮す」と述べて結ばれているが、その疏の撰述にあたったのこそ他ならぬ元行沖であったのであって、ここにも劉知幾との因緣が考えられるであろう。余嘉錫氏の考證によれば、まず玄宗の講義錄である『孝經制旨』が存し、それを簡約にして注が作られ、さらに元行沖が制旨の意にもとづいて疏を作ったのであるという。(10) もっとも、制旨と注の制作にも、元行沖が何らかの役割でかかわっていたと考えるのがむしろ自然であろう。(11)

「異義を究覽して其の善に擇從す能わず」と專經の草野生を批判する王劭の「史論」、その言葉を「釋疑」に引く元行沖の立場は、右に述べたような玄宗注の立場と軌を一にするものである。元行沖の『孝經』疏の原型はもはやうかがうことができぬけれども、玄宗注にもとづく邢昺の正義の藍本として、そのなかに吸收されている。(12)

二　「釋　疑」

その後、あらためて玄宗から元行沖に魏徵注『類禮』の義疏を撰述せよとの命が下ったのは、左衞率府長史魏光乘の奏請にもとづいてのことであった。「今の禮記は章句踳駁なり。故太師の魏徵は編次を更め注を改む。學に立てて傳授するに堪ゆ」（『唐會要』巻七七貢擧部・論經義）。かくして元行沖は、國子博士の范行恭、四門助教の施敬本とともに檢討刊削を加え、開元十四年（七二六）の八月、五十巻の義疏を奏上した。『類禮』義疏は學官に立てられるはずであったが、しかるに思わぬ横槍が入った。尙書右丞相の張說[13]がつぎのように駁奏したのである。「今の禮記は是れ前漢の戴德、戴聖の編錄する所にして、歷代傳習すること已に千年に向んとし、著らかに經敎と爲りて刊削す可からず。魏の孫炎に至って始めて舊本を改め、類を以て相い比し、抄書に同じき有り。先儒の非る所にして、竟に行用せられず。貞觀中、魏徵は孫炎の修むる所に因って更に整比を加え、兼ねて之れが注を爲る。先朝は厚く賞錫を加うと雖も、其の書は竟に亦た行なわれず。今ま行沖等は徵の注する所を解し、勒して一家と成すも、然れども先儒と第乖し、章句は隔絕す。若し行用せんと欲すれば、竊かに未だ可ならざらんことを恐る」。この張說の意見は納れられた。元行沖たちは絹二百匹の褒美にあずかり、また『類禮』義疏は內府に貯えられることとなりはしたけれども、ただそれだけにおわった。それはついに學官に立てられることはなかったのである。[14]

張說の駁奏に登場する孫炎とは、字をもって行なわれる孫叔然。『三國志』巻一三、魏志王肅傳にその名がみえる。鄭玄の門人に師事し、東州の大儒と稱せられた。[15]著書の一つとして『禮記』注があり、『經典釋文』序錄に「孫炎注禮記二十九巻」、隋志に「禮記三十巻、魏祕書監孫炎注」を著錄する。寥々たる佚說が馬國翰の『玉函山房輯佚書』に輯められているに過ぎず、一斑を見て全豹を卜するにはとても足りぬが、「始めて舊本を改め、類を以て相い比し、抄書に同じき有り」と張說が評しているところから察すれば、小戴『禮記』のテキストの編次を改め、あたかも類書のごとくに排列し

た書物であったろう。[16] そして唐初の魏徵がそれにさらに手を加え、あらたに注釋を施したのである。『舊唐書』巻七一魏徵傳には、孫炎を襲ったことはいわぬけれども、つぎの記事がある。「徵は戴聖禮記の編次不倫なるを以て、遂に類禮二十卷を爲る。類を以て相い從え、其の重復を削り、先儒の訓注を採って善を擇んで之れに從い、研精覃思すること數年にして畢る。太宗は覽て之れを善しとし、物一千段を賜い、數本を錄して以て太子及び諸王に賜い、仍お之れを祕府に藏す」。[17]

元行沖は魏徵の『類禮』注を敷衍すべく義疏の撰述にあたったけれども、しかし本意に反して學官に立てられることなくおわり、そのため「諸儒の己れを排するを恚り、退いて論を著わして以て自ら釋し」、その文章を「釋疑」と名づけたのである。客と主人との對論の形式をもって構成される「釋疑」の文章は、王劭の「史論」からの引用の他にも、漢唐閒の注釋學に關して考えるべき問題を含んでいるように思われる。そしてそこには、王劭の「史論」の引用についてすでに一端を見たように、全體を通じて章句の學、あるいは章句の徒にたいするやるかたのない不滿が述べられ、「章句を變易する」ことがいかに難しいか、そのことが難の一から難の五として語られているのである。

すでに漢代以來、章句の學は守舊的で硬直した學問にたいして與えられる名辭となっていた。それに反して、「章句を爲めず」とか「章句を守らず」とかいえば、大義の闡明を志す自由で開放的な學問のあり方を意味した。たとえば『後漢書』桓譚傳に、「博學多通、徧ねく五經を習い、皆な大義を詁訓し、章句を爲めず」と傳え、章懷注に、「說文に曰く、詁は古言を訓うなり。章句とは章を離ち句を辨じ、委曲枝派なるを謂う」というがごとくである。あるいはおなじく班固傳に、「載籍を博貫し、九流百家の言、窮究せざるは無し。學ぶ所は常の師無く、章句を爲めず、大義を擧ぐるのみ」と傳えるがごとくである。漢代において、それは、今文學と今文學に對立した古文學の學風のちがいとして顯在化したのであるが、唐代においても、章句家と章句家ならざるものとの對立は、「釋疑」によって知られる以外にも存在した。たとえば則天武后時代の人である王元感は、長安三年（七〇三）、みずから撰述した『尙書糾謬』十卷、『春秋振滯』二十卷、

『禮記繩愆』三十卷その他を官より紙筆を給せられたうえ祕書閣に寫上したいと請い、その是非が弘文、崇賢兩館の學士と成均博士にはかられたが、「專ら先儒の章句を守る」ところの學士の祝欽明、郭山惲、李憲たちは、王元感が「舊義を掎摭する」ものであると非難し、それにたいして、魏知古、徐堅、張思敬および劉知幾たちが王元感を支持した（『舊唐書』卷一八九下、儒學傳）。祝欽明たちが章句家をもってよばれたのは、もとより漢代におけるような意味においてではない。祝欽明は「少くして五經に通じ、兼ねて衆史百家の說に涉り」、郭山惲も「少くして三禮に通じ」、ともに當時の大儒と稱せられる人物であった（同上）。それにもかかわらず、かれらがそのようによばれたのは、恐らく『五經正義』に代表される傳統的解釋學を墨守する立場に立ったからであろう。(18)

ところで「釋疑」は、まずつぎのような客と主人との問答をもって始まる。

——小戴（禮記）の學問はずっと古くから行なわれ、康成（鄭玄）の注釋は、現在、學官に列せられている。傳え聞くところでは、魏公（魏徵）はなんと改編を加え、（貴公は）さらに制旨を頂戴のうえ、疏を作って頒行しようとしているとか。いったい二つの經書に誰が優劣をつけるのであろうか。(19)

——小戴の禮は漢末に行なわれた。馬融が注を書いたが、時人の目にはふれず、盧植は二十九篇を分合して說解を作ったが、(20)世間ではそれを授かって習うものはなかった。鄭玄は子幹（盧植）をつてとして季長（馬融）に師事した。たまたま黨錮の獄が發生し、師の門をたたくすべも失われると、康成は潛伏生活のなかで、いり亂れた古典の整理にあたった。探究ひとつに志し、相談相手もなかったが、それでも編集と著述に疲れも忘れ、正しいことを耳にすれば意見を改めたこと、鄭志のなかに百條近くにのぼる具體的な記述がある。(21)だが、章句の徒はそれをのぞきだにせず、あい變らず前車の轍に從い、舟ばたにしるしをつけて失った劍を探し求めたというあの話とそっくりである。王肅はその後をうけて重ねて解釋をひろげ、あるいはさまざまに修正と反駁を加えたが、それでもやはり（禮記の）本の篇章にもとづいた。さらに鄭學の徒で孫炎なる人物がおり、鄭玄の義を支持したものの、從前の編立てを改めたのであっ

た。それ以後、條例はこまかく分れ、急所をつく見解がしばしば現われた。馬伾は增訂を行なって百篇以上にもなろうとし、葉遵は刪修を施してわずかに十分の二が原型をとどめる有様であった。(22)

すなわち、鄭學に對抗した驍將の王肅ですら『禮記』四十九篇のテキストの編立てに手を加えることはなかったのだが、孫炎以後、さかんに改編が行なわれるようになったのである。馬伾とは司馬伾。『舊唐書』經籍志に「禮記寧朔新書二十卷、司馬伾序、王懋約注」、『新唐書』藝文志に「司馬伾周官寧朔新書八卷、又禮記寧朔新書二十卷、並王懋約注」を著錄するが、『隋書』經籍志はただちに「禮記寧朔新書八卷、王懋約注、梁有二十卷」として著錄する。實際は王懋約の撰であったのであろう。司馬伾は晉の元帝の祖父にあたる琅邪王であって、寧朔將軍に起家した(『晉書』卷三八)。王懋約の事蹟は不明であるが、隋志にはまた「梁又有周官寧朔新書八卷、晉燕王師王懋約撰、亡」とあり、恐らく燕王師となる以前に司馬伾の屬僚であったのであろう。また葉遵は業遵とも書される人物。『經典釋文』序錄や隋志に業遵注の「禮記十二卷」を著錄し、兩唐書志では葉遵。『經典釋文』によれば、「字は長儒。燕の人。宋の奉朝請」。

さて、主人の言葉はつぎのようにつづく。

——魏公(魏徵)は諸家の議論が錯雜しているのを恨みとして、諸說のなかから精深なものをより集めた。經文の不同については訂正しようとはしなかったが、注と義理が見當ちがいの場合には削除して磨きあげなければならぬ。完成して上聞に及ぶや、太宗は嘉賞され、絹千匹を與えられたうえ、謄錄して皇太子と藩王に賜わった。天下に廣く頒布しようと思うが、まだ疏義がない。今上陛下が大業をお繼ぎになると、古の代を耽玩し、儒敎を崇められた。御先祖(太宗)の規矩は繼承すべきだとお考えになり、そこで暗愚のわたしに舊義を明らかにし辨別せよと命ぜられた。注は過去の說ととりかえ、義理はあらたな文章に改めたところがあり、博搜に精勵し、數年をかけてようやく完成した。具錄して上進したところ、敕をもって群儒に手交され、詳しく檢討を加えたうえその疏密を評定してもらえるものと期待した。ところが思いもよらぬことに、章句の士は言い古された主張を堅持し、とりわけ新鮮で堅實な說は聞

くのもけがらわしいという態度であって、現狀に從おうと、何箇月もぐずぐずと時間をかけ、踏みくちゃにされてしまったのである。優劣長短は通識の人物によって決定されるもの。自分の手に成ったものについて自分の口から答えるのだから、とかくの詮議はさしひかえたい。(23)

主人はあらまし以上のごとく經過を說明し、それにたいして客は、當事者よりも、第三者の目の方が確かだから、王朝の裁定をもとめて申し立てをしてはどうか、と誘うが、主人は「章句を變易する」ことの困難を、以下のごとく五條に分けて答えるのである。

——昔、孔安國は壁中から發見された書物に注釋を施したが、たまたま巫蠱の事件がおこり、經籍の道は息の根をとめられた。族兄の孔臧が與えた書簡につぎのようにいう。「俗儒たちがみだりがわしい言辭で大義を冒瀆することに日頃から憤慨し、亂れた世を治めて正しい狀態にかえそうと思いながら果せないでいることを知った。しかしながら、達雅博通の人物はいつの世にも現われるわけではなく、輕薄な學問の守株の徒はどこにもわんさといるものだ。衆人のまちがいを正すことが難しいのは、昔からそうなのである。君のこの道が伸張されることなく、一人きわだった智惠のために非難をあびるのではないかとひたすら心配している」。つまり、章句を變易することが難しいとわかる第一點である。(24)

孔安國云々は、劉歆の「移書讓太常博士」と『漢書』藝文志に詳しく說くところ。孔臧の書簡は、『孔叢子』連叢子に收められる「與從弟書」なるものからの引用である。

——漢に孔季產なる人物がおり、古學を專門とした。一方、孔扶なる人物は、世俗と調子を合わせることにつとめた。扶は季產にいった。「今日、朝廷ではみんな章句內學を修めているのに、君一人だけは古義を修めている。古義を修めるのは章句內學を批判することであり、章句內學を批判するのはわが身を危くする道だ。一人よがりは世の中にいれられず、きっと禍患をのこすことになるのではあるまいか」。つまり、章句を變易することが難しいとわかる第二

點である。(25)

これもやはり『孔叢子』連叢子に、孔大夫が孔季彦に語ったところとして類似の文章がある。孔季産は孔季彦の誤りであろう。孔大夫を孔扶とするのは、『後漢書』順帝紀陽嘉二年條に、「六月辛未、太常なる魯國の孔扶を司空と爲す」とあるのをふまえてのことか。ちなみに、『後漢書』儒林孔僖傳に二子の長彦と季彦について、「長彦は章句の學を好み、季彦は其の家業を守る」と傳え、惠棟の『後漢書補注』巻一八は「章句學」を「章句內學」に作る連叢子を引いたうえ、つぎのように説明する。「圖讖を以て經を說く、之れを章句內學と謂う。何休の公羊に於ける、鄭元の三禮に於ける、是れなり……」。

――劉歆は書物に通じ文章もうまく、官署で天子の下問に備える役目をおおせつかった。左氏傳を讀んで大いに氣にいり、やがて近侍にひきたてられると、これを學官に立てたく思った。哀帝は嘉納し、そのことについて討論させたが、各人ともぐずぐずと煮えきらず、正面きって議論しようとはしない。劉歆は回狀を送りつけて難詰したが、その言辭がまことに過激だったので、博士たちはこぞって立腹し怨みに思った。名儒の龔勝は時に光祿大夫であったが、劉歆のこの議論を讀むと引責辭職を願い出た。司空の師丹はそのため大いに怒りを發し、劉歆は從前の典籍を改亂し、先朝の立てられたところを誹謗するものだと奏言した。帝は、「これは道術を廣めんとしてのこと、誹謗とよぶにはあたるまい」といったが、このことで（劉歆は）大臣たちと衝突し、誅罰を懼れて河南太守への轉出を求めた。宗室のものは三河の長官とはなれぬため、あらためて五原太守に徙った。君賓（龔勝）ほど好學の譽れがたかく、また仲公（師丹）ほど見識にすぐれた眞理の擁護者ですら、仲閒うちの朋黨の議論の壓力によって、ついに子駿（劉歆）を世閒から後指を指されるようなことにならせたのである。つまり、章句を變易することが難しいとわかる第三點である。(26)

これは、『漢書』劉歆傳の記事からの摘錄である。

——子雍（王肅）は鄭玄の數十ないし百にのぼるまちがいを正したが、鄭學を墨守する人物として、當時、中郎の馬昭がおり、王肅の誤りであると上書した。王學の徒に詔が下って口答陳述させ、さらに博士の張融に經典をふまえつつ論詰させることとした。張融はただちに（學者を）召集して一つ一つ判定處分を下した。理の是非は聖證論に具わっている。王肅は答辯のため、まる一年もくたくたであった。つまり、章句を變易することが難しいとわかる第四點である。(27)

王肅の『聖證論』をめぐっての鄭學と王學との論爭の經緯は、他ならぬ「釋疑」のこの條とつぎの條とによってうかがうことができるのである。馬昭は、『三國志』卷四、魏志高貴鄉公紀の甘露元年（二五六）條に、博士馬照としてみえる人物であるにちがいない。その年の夏四月丙辰、太學に行幸した帝は、まず易について博士淳于俊と、ついで尚書について博士庾峻と、さらに『禮記』曲禮上の「太上立德、其次務施報」の句について博士馬照といくらかの問答をかわしたのである。また張融は、隋志論語類に「孔子家語二十一卷、王肅解」の著錄につづいて「梁有當家語二卷、魏博士張融撰、亡」とあり、姚振宗の『隋書經籍志考證』は、『當家語』とは「王肅の家語の爲めに作るか」と疑っている。ともかく、『聖證論』には王肅の鄭玄批判とともに、鄭學の徒である馬昭の駁議、それにたいする王學の徒の答議、そして兩說の是非を判定する張融の評議があわせられたのであって、王學の徒の首選は孔晁であった。(28) 隋志に「梁有尚書義問三卷、鄭玄王肅及晉五經博士孔晁撰」、「春秋外傳國語二十卷、晉五經博士孔晁注」の著錄のある人物である。

——卜商（子夏）は聖人かと疑われて曾輿（曾參）に譏られ、木賜（子貢）を賢人あつかいしたために叔孫武叔はもの笑いとなった。(29) それ以後のこととしては、ただひとり鄭公（鄭玄）がもちあげられている。王粲はこういっている。「世間では、伊水と洛水以東の地域、淮水と漢水以北の地域には康成一人がいるだけだとほめそやして敬わざるものはなく、口をそろえて、先儒には闕けた點が多いが、鄭氏にはすべてが備わっているといっている。私は內心ひそかに怪訝に思い、そこでかれの學問をさがし求めて尚書の注を手に入れた。ひきこもって考察し、かれの考えはすべてを盡

くした。かれの考えはすべてを盡くしたが、疑問の箇所はあい變らず納得がゆかぬままである」。合計二卷が王粲の文集に列せられている。(30)

隋志に引く梁錄に「尚書釋問四卷、魏侍中王粲撰」とあり、『舊唐書』經籍志では「尚書釋問四卷、鄭玄注、王粲問田瓊韓益正」として著錄するが、建安七子の一人である王粲の文集に鄭玄の『尚書』注を批判した文章が存したことは、『顏氏家訓』勉學篇の一文によって確認することができる。「俗閒の儒士は群書に涉らず、經緯の外は義疏のみ。吾れ初め鄴に入りしとき、博陵の崔文彥と交遊し、嘗つて王粲集中の難鄭玄尚書事を說く。崔は轉じて諸儒の爲めに之れを道わんとし、始めて將に口に發せんとするに、懸よりして排擯せられ、云わく、文集には止だ詩賦銘誄有るのみ、豈に當に經書の事を論ずべけんや。且つ先儒の中に未だ王粲有るを聞かざるなり、と。崔は笑って退き、竟に粲の集を以て之れに示さず」。ここに登場する儒者先生こそ、王劭の「史論」にいうところの專經の草野生の見本とすべきものであろう。(31) さて「釋疑」は、ふたたび王肅の『聖證論』に言及していう。

——また王肅は鄭玄の說六十八條を改め、張融は檢討のうえ是非を定めた。鄭玄注は淵深廣博、兩漢四百餘年を通じて鄭玄より偉大なものはおらぬと張融はたたえているが、しかしながら、二郊の祭、殊天の祀は鄭玄の誤りであるし、皇天は自って出ずる所の帝を祖とすということに關しても、鄭玄の考えは見當はずれである。服虔の左傳解釋もまちがいがあるのを免れない。後世のものがそのようにいうのは、聖人の心を弘めたいと思うからであって、自分の自慢をして他人の名聲をおおいかくそうというのではない。何となれば、君子はこころがけとして自分の過ちを聞きたいと願うものであって、仲尼の言葉に、「過つや人皆な之れを見、更むるや人皆な之れを仰ぐ」とあるのがそのことだ。ところが專門の徒は他人も自分と同じ立場であろうと考え、先師の誤りを攻擊するものがあろうものなら、まるで父、母の名を耳にしたように驚き、故人のありがたいお言葉が黃泉で踏みつけにされたと考える始末である。(32)

元行沖が鄭玄の誤りとして退ける「二郊の祭、殊天の祀」とは、圜丘と南郊における祭りを別のものとしたうえ、昊天

上帝を昊天と上帝とに分け、圜丘では昊天を、南郊では上帝を祭るのだとし、さらに五天帝の存在を考えるところの鄭玄の説である。『禮記』祭法、「有虞氏禘黄帝而郊嚳、祖顓頊而宗堯、……周人禘嚳而郊稷、祖文王而宗武王」の鄭注にいう。「禘、郊、祖、宗とは祭祀して以て配食するを謂うなり。此この禘は昊天を圜丘に祭るを謂うなり。上帝を南郊に祭るを郊と曰い、五帝五神を明堂に祭るを祖、宗と曰う……」。そして、このような鄭玄の解釋にそもそも異を唱えたのが王肅であったこと、『困學紀聞』巻四に端的な指摘がある。「王肅の聖證論は鄭康成を譏短して謂わく、天體は二無く、郊と丘とは一爲り。禘は是れ五年ごとに先祖を大祭す。圜丘及び郊には非ず。功あるを祖とし德あるを宗とす。是れ不毀の名にして明堂に配食するには非ずと。皆な禮學に功有って、先儒は之れを違しとす」[33]。また、「皇天は自って出ずる所の帝を祖とす」とは鄭玄のいわゆる感生帝説をさしているのにちがいなく、『禮記』大傳、「禮不王不禘、王者禘其祖之所自出、以其祖配之」の鄭注につぎのように説かれている。「凡そ大祭を禘と曰う。自は由なり。其の先祖の由って生ずる所を大祭すとは、天を郊祀するを謂うなり。王者の先祖は皆な大微五帝の精に感じて以て生ず。蒼（帝）は則ち靈威仰、赤は則ち赤熛怒、黄は則ち含樞紐、白は則ち白招拒、黑は則ち汁光紀。皆な正歲の正月を以て之れを郊祭す。蓋し特に尊ぶなり……」。王肅が鄭玄の感生帝説を退けたこと、これまた周知のところであって、上記の『禮記』祭法の疏に引かれた『聖證論』にはつぎのようにいう。「……王肅はまた郊と圜丘とは一であり、郊はすなわち圜丘であると考え、鄭玄を批判していった。案ずるに、易（説卦傳）に、帝は震に出ず、震とは東方、萬物を生ずる初め、とある。だから王者が支配する初めにあたっては木德をもって天下に王となるのであり、木の精から生ずるわけではない。五帝はすべて黄帝の子孫であり、それぞれ稱號を改めて交代するのであって、五行を次序とする。大微の精から生ずるなんてことがあろうか」[34]。

かく、元行沖が鄭玄の誤りとして退けるところは、王肅が鄭玄と鋭い對立を示すところに他ならぬのであり、つまり元行沖は王肅説に與する立場に立つのである。そして「釋疑」には、右の文章の後にすでに冒頭に擧げた王劭の「史論」の文章が引かれ、「章句を變易する」ことの困難五條を列擧しおえた主人はいよいよ言葉をしめくくる。そこにはまたして

も『孔叢子』連叢子から、「物極まれば則ち變ず。百年の外に及ぶ比おい、當に明直の君子有るべきも、吾れと代を同じくせざることを恨みとす」という孔季產（彥）の言葉が引かれたうえ、「僕は專經に非ざれば章句を習うこと罕し」と、章句を習う專經の徒にあらざることが誇らしげに語られている。

三　『類禮』義疏と『大唐開元禮』

元行沖の『類禮』義疏を學官に立てることにたいして張說から横槍が入り、かくして「釋疑」が書かれた次第は以上のごとくである。知麗正殿校寫書事であった元行沖が衰老をもって職を退き、開元十三年（七二五）、麗正殿書院が集賢殿書院と名が改まったのの知院事となったのが他ならぬ宰相の張說であり、[35]『類禮』義疏の完成は翌十四年の八月のことであった。そして實はその年に、やがて『大唐開元禮』として完成されることとなる新禮の編纂が張說によって發議されているのである。發端は、「禮記を改撰し、舊文を削去し、而して今事を以て之れを編まん」との通事舍人王嵒の上疏であり、集賢院學士の詳議に付された。しかし、『類禮』とおなじく『禮記』の改撰を要求する王嵒の上疏は、やはり張說によって退けられた。張說は『類禮』義疏を退けた時と同樣に、「禮記は漢朝の編む所、遂に歷代不刊の典と爲る。今ま聖を去ること久遠、恐らくは改易し難し」と述べたうえ、つぎのような意見を開陳した。「今の五禮儀注は貞觀と顯慶の兩度の修する所にして、前後頗る不同有り、其の中或いは未だ折衷せず。望むらくは學士等と更めて古今を討論し、刪改行用せん」（『舊唐書』禮儀志一）。かくして、太宗時代に房玄齡と魏徵等を總裁として編まれた貞觀禮、高宗時代に長孫無忌を總裁として編まれた顯慶禮の改定に着手され、開元十八年（七三〇）の張說の死後には集賢院學士の蕭嵩が代って責任者となり、開元二十年（七三二）に開元新禮が完成したのであった。元行沖の死後三年のことである。

このように考えるならば、『類禮』義疏がついに行用されることなくおわったのは、『類禮』は『禮記』の改編であり、開元新禮は吉・賓・軍・嘉・凶の五禮ではあるけれども、開元新禮の編纂がまさしく日程にのぼろうとしていたことと關

係があるのではあるまいか。元行沖の禮解釋が『大唐開元禮』と對立するいくらかの事實を指摘することができるのであって、一つは父親在世のうちに母親が亡くなった場合、子はいかなる喪に服すべきかをめぐっての問題である。もっとも遺憾ながら、この問題についての元行沖の解釋が『類禮』義疏にも含まれていたかどうかを確かめるすべはない。

『舊唐書』禮儀志七によれば、そもそも上元元年（六七四）の則天武后の上表がことの起りであり、喪服子夏傳のきまりでは一年であるのを三年に改められよというのがその主旨であった。「父在まさば母の爲めに服すること止だ一朞の如きに至っては、心喪すること三年なりと雖も、服は尊降に由る。竊かに謂うに、子の母に於けるや、慈愛は特に深く、母非ざれば生まれず、母非ざれば育たず。燥けるを推して濕れるに居り、苦きを咽みて甘きを吐き、生養に勞瘁し、恩は斯こに極まれり。所以に禽獸の情すら猶お其の母を知る。三年懷に在れば、理として宜しく崇報すべし。[36] 若し父在まさば母の爲めに服すること止だ一朞ならば、父を尊ぶの敬は周ねしと雖も、母の慈に報ゆるには闕くる有り。且つ齊斬の制もて差減と爲すに足るに、[37] 更に周らすに一朞を以てせしむれば、恐らくは人の子の志を傷らん。今ま請うらくは、父在まさば母の爲めに三年の服を終えしめんことを」。則天武后のこの上表はもとより高宗によって裁可されるところとなったが、しかし時代がかわると、この問題をめぐって議論が沸騰した。

すなわち、開元五年（七一七）、右補闕の盧履冰が一年とすべきことを上言して百官の詳議に附され、刑部郎中の田再思が三年とすべきことを建議し、盧履冰は一年とすべきことをあらためて二度にわたって上奏したのである。そのなかで盧履冰が、則天武后の議はただちに行なわれたわけではなく、垂拱年中に至って「始めて格に編入」されたと述べ、さらにつぎのように述べていることに注目される。「夫の上元の肇年を原ぬるに、則天は已に潛かに政を秉り、將に僭簒を圖らんとして預じめ自ら崇先し、慈愛の喪を升せて以て尊嚴の禮に抗せんとす」。たしかに上元元年は、高宗が天皇を稱するとともに則天武后が天后を稱した年であった。ともかく盧履冰は、「中書門下に付して商量處分せられん」ことを請い、左散騎常侍の元行沖が一年說を支持するつぎの奏議を行なったのである。元行沖が左散騎常侍となったのは開元七年

（七一九）。「父に事うるに資りて以て君に事え、孝は父を嚴うより大なるは莫し。故に父在まさば母の爲めにするに職を罷めて齊周（齊衰一年）、而して心喪三年。之れを尊厭（父を尊び母を厭う）と謂う者は、則ち情は申べて禮は殺すればなり。斯の制や、以て飛走（鳥獸）に異なり、華夷を別つ可し。羲農堯舜は之れを易むる莫きなり、文武周孔の同に尊ぶ所なり」。

かくして開元七年の八月、格條の「父在爲母齊衰三年」を廢して「諸の服紀は宜しく一に喪服の文に依るべし」との敕が下ったが、しかし卿士の家の服喪はまちまちの有様であり、ために元行沖は、「聖人の厭降の禮を制するは、豈に母の恩の深きことを知らざらんや。祖を尊び禰を貴び、其の遠くしては禽獸と別ち、近くしては夷狄と異にせんと欲するを以ての故なり。人の情は搖ぎ易く、淺識の者は衆し。一たび其の度を紊さば、其れ止む可けんや」と慨嘆したという。そして開元二十年の新禮では、上元元年の敕が復活して「父在爲母齊衰三年」と定められたのであった。『大唐開元禮』卷一三二、凶禮、五服制度の項にわれわれはつぎの記事を見出すであろう。「正服。子爲母。舊禮、父卒（在？）爲母周、今改與父服同」。

元行沖の「釋疑」が鄭玄の感生帝說に反對していること、つまり王肅に與していることを先にみた。いまこの點について『大唐開元禮』との關係を確かめるならば、その參考となるのは、『舊唐書』禮儀志一、『新唐書』禮樂志三、同儒學王仲丘傳等にみえる王仲丘の議論である。王仲丘は實は『大唐開元禮』の實際上の撰者であったのであって、王仲丘の議論は、『大唐開元禮』序例上、神位、「正月の上辛、祈穀し、昊天上帝を圜丘に祀り、高祖神堯皇帝を以て配座す。又た五方帝を壇の第一等に祀る」、その後にもそのまま載せられており、祈穀の儀にあわせて感生帝を祀ることが論ぜられているのである。

すなわち、「右按ずるに、大唐前禮は感生帝を南郊に祀り、大唐後禮は昊天上帝を圜丘に祀りて以て祈穀す」。大唐前禮とは貞觀禮、大唐後禮とは顯慶禮。ところで、「而るに鄭康成云わく、天の五帝は遞いに四時に王たりて、王者の興る

は必ず其の一に感ず。其の感ずる所に因って別祭して之れを尊ぶ。故に夏正の月、其の生ずる所の帝を南郊に祭り、其の祖を以て之れに配す。故に周は靈威仰を祭り、后稷を以て之れに配し、因って以て祈穀すと。所説に據れば、感生帝を祀るの意は本より祈穀には非ず」。鄭玄説によれば、感生帝の祀りこそが本來であり、祈穀はつけたしとして行なわれるのだが、しかし「先儒（鄭玄）の此の説、事恐らくは憑り難し」。そこで、鄭玄説とは反對にむしろ祈穀の儀に重點を置きながら、それにあわせて感生帝の祀りを行なうべきだという。「今ま祈穀の禮、請うらくは禮に準じて之れを修めん。且つ感生帝の祀りは之れを行なうこと自のずから久し。……請うらくは祈穀の壇に於いて徧ねく五方帝を祭らん。夫れ五方帝なる者は五行の精、五行なる者は九穀の宗なり。今ま請うらくは二禮並びに行ない、六神咸な祀らんことを」。二禮とは祈穀の儀と感生帝（五方帝）の祀りであり、六神とは昊天上帝と五方帝のことである。

結び

「釋疑」についてみられるように、元行沖は守舊的な學問にたいする革新を志し、守舊的な學問、すなわち恐らくは『五經正義』に代表される傳統的經書解釋學を章句の學とよんだ。彼が目ざしたのは、王劭の「史論」を引いて語るように、專經ならざるところの、「異義を究覽して其の善に擇從する」士大夫の學であった。

しかしところで興味深く思われるのは、そのことを表明するにあたって元行沖がひきあいにする先人なり書物なりが、中國學術史上において胡散臭い眼で見られているものがすくなくない事實である。孔安國と尚書、劉歆と左傳のことはしばらく措くとしても、鄭玄に對立した王肅が『孔子家語』を僞作したことは誰しもが疑わざるところであり、その『孔子家語』を『聖證論』の論據に用いるという手のこんだことをやってのけた。「釋疑」がしばしば引用する『孔叢子』の素性もすこぶる疑わしい。正篇は陳涉の博士の孔鮒に、「連叢子」の主部は漢の武帝期の孔臧に僞託された書物である。朱子はむしろ『孔子家語』の肩をもっていう。「家語は書きかたが不純だが、當時の書物だ。孔叢子は後世のでっちあげだ」。(38)

王劭もなかなか癖のある學者のように思われるが、元行沖は實はそのような事情を十分承知していたのではなかったか。それらを後楯にたのまねばならぬほど、章句家の壘壁は堅固であったということもあったろう。しかし何よりも、「異義を究覽して其の善に擇從す」るのがかれの立場であった。「傳は通經を以て義と爲し、義は必當を以て主と爲す」という玄宗「孝經序」の言葉にも、なにがしかのかれの立場の反映が認められるであろう。かれは敢えて胡散臭い人物や書物をもちだして、自分の立場を語らしめたかったのではなかったか。

元行沖は開元十七年（七二九）十月庚申に七十七歲をもって卒した。(39)『舊唐書』卷九七陳希烈傳につぎの記事がある。「開元中、玄宗は意を經義に留むるも、褚无量、元行沖の卒して自りの後、希烈と鳳翔の人馮朝隱とを得て、常に禁中に於いて老、易を講ぜしむ」。玄宗の興味が經學から老子と周易の玄學に移ったことをいうのであり、陳希烈と馮朝隱とによる講書は、やがて玄宗のいわゆる御注の第二として『道德經』注ならびにその疏を生むこととなる。そのことを述べるためには、もはや別稿を用意しなければならない。

註

（1）『史通』古今正史篇、「……由是世薄其書、號爲穢史」。すでに『北齊書』卷三七魏收傳に、「……於是衆口諠然、號爲穢史、投牒者相次、收無以抗之」とある。

（2）沈約の『晉書』は亡われたが、『宋書』卷二七符瑞志上につぎの記事がある。「先是宣帝有寵將牛金、屢有功、宣帝作兩口檻、一口盛毒酒、一口盛善酒、自飲善酒、毒酒與金、金飲之卽斃、景帝曰、金名將、可大用、云何害之、宣帝曰、汝忘石瑞馬後有牛乎、元帝母夏侯妃與琅邪國小史姓牛私通、而生元帝」。

（3）たとえば『史通』曲筆篇につぎの記事がある。「如王劭之抗詞不撓、可以方駕古人、而魏收持論激揚、稱其有慚正直、夫不彰其罪、而輕肆其誅、此所謂兵起無名、難爲制勝者」。また、傅振倫『劉知幾年譜』（商務印書館、一九五六重印）一〇四頁、參照。

（4）本傳のほか、『舊唐書』卷八玄宗紀開元九年條、卷四六經籍志序、卷一〇二韋述傳、卷一九〇中文苑齊澣傳、『新唐書』卷一九九儒學馬懷素傳等に關連の記事がある。

（5）以上の經過は、主に『册府元龜』卷六〇四學校部・奏議三、卷六三九貢舉部・條制一により、『唐會要』卷七七貢舉部・論經義を參照。劉知幾と司馬貞の議は『文苑英華』卷七

六六にも收められ、また『孝經』に關する議論は、邢昺の『孝經』疏の卷首にもとられている。

（6）『新唐書』卷一三二劉子玄傳。『大唐新語』著述篇にはつぎのようにいう。「子玄爭論、頗有條貫、會蘇宋文吏拘於流俗、不能發明古義、竟排斥之、深爲識者所嘆」。蘇宋とは蘇廼と宋璟であろう。

（7）王孝逸の肩書は、『唐會要』では祕書學士。『隋書』卷四一蘇威傳に、「國子學請蕩陰人王孝逸爲書學博士」とある。また王劭と劉炫との關係について、同卷七五儒林劉炫傳に、「奉敕與著作郎王劭同修國史」とある。

（8）今文孝經は十八章。古文孝經は庶人章が二つに、曾子敢問章すなわち聖治章が三つに分れ、さらに閨門章の一章が加わって二十二章。

（9）南齊の陸澄に關しては、劉知幾の議につぎのようにある。「自宋梁以來、多有異論、陸澄以爲非玄所注、請不藏於祕省、王儉不依其請、遂得見傳於時」。詳細は、『南齊書』卷三九陸澄傳。玄宗注が孔傳を用いること、たとえば開宗明義章「大雅云、無念爾祖、聿脩厥德」の注、「義取恆念先祖、述脩其德」について、邢疏は「此れ孔傳に依るなり」と指摘する。とはいえ、鄭氏注を退けているわけではないこと、やはりたとえば開宗明義章「夫孝、德之本也」の注、「人之行、莫大於孝、故爲德本」について、「此れ鄭注が其の聖治章の文を引くに依るなり」と邢疏にいう。

（10）余嘉錫『四庫提要辯證』卷一「孝經正義三卷」條。ちなみに、『孝經』の注と疏は天寶二年（七四三）と天寶五載（七四六）にそれぞれ重修が行なわれた。『册府元龜』卷四〇帝王部・文學および『唐會要』卷三六修撰部、同卷七七貢擧部・論經義、參照。從って正確にいえば、現在行なわれるのは天寶重注本であり、天寶四載に立てられた「石臺孝經」に刻まれているのも、もとより重注本である。

（11）開元二十年に玄宗の『道德經』注、二十三年に疏が完成するが、實際の功績はその侍講にあたった集賢院學士の陳希烈たちに歸すべきもののように思われることからの類推。

（12）邢昺の「孝經注疏序」に、「今特翻載元疏、旁引諸書、分義錯經、會合歸趣……」という。

（13）元行沖傳には左丞相とあるが、陳祖言『張說年譜』（中文大學出版社、一九八四）によって右丞相と改める。

（14）『大唐新語』識量篇にこの話を錄し、「時議以爲說之通識、過於魏徵」という。

（15）拙稿「鄭玄の學塾」（『中國貴族制社會の研究』、京都大學人文科學研究所、一九八七）、參照。

（16）「以類相比、有同抄書」は、『詩品』序の「大明泰始中、文章殆同書抄」を眞似た表現。

（17）『通志』藝文略二に、「書鈔」として「魏徵次禮記二十卷」を著錄。

（18）稻葉一郎「中唐における新儒學運動の一考察―劉知幾の經書批判と啖・趙・陸氏の春秋學―」（『中國中世史研究』、東海大學出版會、一九七〇）、參照。

（19）『舊唐書』元行沖傳によって原文を錄す。「小戴之學、行之已久、康成銓注、見列學官、傳聞魏公、乃有刊易、又承制

旨、造疏將頒、未悉二經、孰爲優劣」。

(20) 姚振宗の『隋書經籍志考證』は、あたかも馬融が月令、明堂位、樂記の三篇を重定したように、盧植は小戴禮四十九篇を分合して二十九篇としたのであろうとの說を立てる。馬融が月令等三篇を重定したというのは、隋志經部・禮類小序の說にもとづくが、その說は諸家の否定するところである。吳承仕『經典釋文序錄疏證』、參照。とするならば、二十九篇は四十九篇の誤寫とみなすのがよいであろう。

(21) このあたりのこと、註(15)の拙稿、參照。

(22) 原文、「小戴之禮、行於漢末、馬融注之、時所未覩、盧植分合二十九篇而爲說解、代不傳習、鄭因子幹、師於季長、屬黨錮獄起、師門道喪、康成於竄伏之中、理紛拏之典、志存探究、靡所咨謀、而猶緝逃忘疲、聞義能徙、具於鄭志、向有百科、章句之徒、曾不窺覽、猶遵覆轍、頗類刻舟、王肅因之、重茲開釋、或多改駁、仍按本篇、又鄭學之徒、有孫炎者、雖扶玄義、乃易前編、自後條例支分、箴石聞起、馬油增革、向踰百篇、葉遵刪修、僅全十二」。

(23) 原文、「魏公病群言之錯雜、紬衆說之精深、經文不同、未敢刊正、注理睽誤、寧不芟蘊、成畢上聞、太宗嘉賞、賚縑千匹、錄賜儲藩、將期頒宣、未有疏義、聖皇纂業、耽古崇儒、高曾規矩、宜所修襲、乃制昏愚、甄分舊義、其有注移往說、理變新文、務加搜窮、積稔方畢、具錄呈進、敕付群儒、庶能斟詳、以課疏密、豈悟章句之士、堅持昔言、特嫌知新愨、欲仍舊貫、沈疑多月、擯壓不申、優劣短長、定於通識、手成口答、安敢銓量」。

(24) 原文、「昔孔安國注壁中書、會巫蠱事、經籍道息、族兄臧與之書曰、相知常忿俗儒淫詞冒義、欲撥亂反正而未能果、然雅達通博、不代而生、浮學守株、比肩皆是、衆非難正、自古而然、誠恐此道未申、而以獨智爲議也、則知變易章句、其難一矣」。「相知」の二字、原文は「相如」。また『孔叢子』連叢子の「與從弟書」は「臧報侍中相如……」と始まるが、『全漢文』卷一三に收めるそれが「臧報侍中相知……」とするのを參考として、ひとまず「相知」と改める。

(25) 原文、「漢有孔季產者、專於古學、有孔扶者、隨俗浮沈、扶謂產云、今朝廷皆爲章句內學、而君獨修古義、修古義則非章句內學、非章句內學則危身之道也、獨善不容於代、必將貽患禍乎、則知變易章句、其難二矣」。

(26) 原文、「劉歆以通書屬文、待詔官署、見左氏傳而大好之、後蒙親近、欲建斯業、哀帝欣納、令其討論、各遷延推辭、不肯置對、劉歆移書責讓、其言甚切、諸博士等皆忿恨之、名儒襲勝、時爲光祿、見歆此議、乃乞骸骨、司空師丹、因大發怒、奏歆改亂前志、非毀先朝所立、帝曰、此廣道術、何爲毀耶、由是犯忤大臣、懼誅、求出爲河南太守、宗室不典三河、又徙五原太守、以君賓之著名好學、仲公之深博守道、猶迫同門朋黨之議、卒令子駿負謗於時、則知變易章句、其難三矣」。

(27) 原文、「子雍規玄數十百件、守鄭學者、時有中郎馬昭、上書以爲肅繆、詔王學之輩、占答以聞、又遣博士張融案經論詰、融登召集、分別推處、理之是非、具聖證論、王肅酬對、疲於歲時、則知變易章句、其難四矣」。

(28) 『玉函山房輯佚書』の馬國翰の解題、參照。

(29) 『禮記』檀弓上、「……曾子怒曰、商、女何無罪也、吾與女事夫子於洙泗之間、退而老於西河之上、使西河之民疑女於夫子、爾罪一也……」。『論語』子張、「叔孫武叔語大夫於朝曰、子貢賢於仲尼……」。

(30) 原文、「卜商疑聖、納誚於曾興、木賜近賢、貽嗤於武叔、自此之後、唯推鄭公、王粲曰、世稱伊洛已東、淮漢之北、康成一人而已、莫不宗焉、咸云先儒多闕、鄭氏道備、粲竊嗟怪、因求其學、得尚書注、退而思之、以盡其意、意皆盡矣、所疑之者、猶未喻焉、凡有兩卷、列於其集」。「曰世」と「康成」の四字、『新唐書』ならびに『困學紀聞』巻二の原註に引用があるのによって補う。なお、王粲に關するこの項、註(15)の拙稿を參看せられたい。

(31) 『顏氏家訓』勉學篇は、この條につづけていう。「魏收之在議曹、與諸博士議宗廟事、引據漢書、博士笑曰、未聞漢書得證經術、收便忿怒、都不復言、取韋玄成傳、擲之而起、博士一夜共披尋之、達明乃來、謝曰、不謂玄成如此學也」。また、「博士賈驢、書劵三紙、未有驢字」という鄴の諺も紹介する。かく、その專經たることをもってとかく輕蔑の對象となるのが博士であった。『北齊書』巻一〇上黨王渙傳のつぎの記事をも參照。「每謂左右曰、人不可無學、但要不爲博士耳」。

(32) 原文、「又王肅改鄭六十八條、張融駁之、將定臧否、融稱玄注泉深廣博、兩漢四百餘年、未有偉於玄者、然二郊之祭、殊天之祀、此玄誤也、其如皇天祖所自出之帝、亦玄慮之失也、及服虔釋傳、未免差違、後代言之、思弘聖意、非謂揚己之善、掩人之名也、何者、君子用心、願聞其過、故仲尼曰、過也人皆見之、更也人皆仰之、是也、而專門之徒、恕己及物、或攻先師之誤、如聞父母之名、將謂亡者之德言而見壓於重壤也」。

(33) 詳細は、加賀榮治『中國古典解釋史—魏晉篇—』(勁草書房、一九六四)第二章「王肅の反鄭玄的解釋の實態・本質とその後の方向」、參照。ちなみに、その後、北朝では鄭玄の說を採用し、南朝では王肅の說を採用したこと、『魏書』巻八四儒林李業興傳につぎの記事がある。「(天平)四年(五三七)……使蕭衍(梁武帝)、衍散騎常侍朱异問業興曰、魏洛中委粟山是南郊邪、業興曰、委粟是圓丘、非南郊、异曰、北閒郊丘異所、是用鄭義、我此中用王義、業興曰、然、洛京郊丘之處專用鄭解……」。

(34) 『禮記』祭法疏の原文、「肅又以郊與圜丘是一、郊卽圜丘、故肅難鄭云、案易、帝出乎震、震、東方、生萬物之初、故王者制之初、以木德王天下、非謂木精之所生、五帝皆黃帝之子孫、各改號代變、而以五行爲次焉、何大微之精所生乎」。

(35) 『舊唐書』職官志二の集賢殿書院の條に、「開元十三年置、……玄宗卽位、大校群書、開元五年、於乾元殿東廊下寫四部書、以充內庫、置校定官四人、七年、駕在東都、於麗正殿置修書使、十二年、駕在東都、十三年、與學士張說等宴於集仙殿、因改名集賢、改修書使爲集賢書院學士」とあり、さらにまた「學士知院事一人」としていう。「開元初、以褚无量馬懷素元行沖相次知乾元殿寫書、及在麗正、乃有使名、張說代元行沖、改院爲集賢、以說爲大學士知院事、說辭讓大字、詔

許之、自是每以宰相一人知院事」。

(36) 『儀禮』喪服子夏傳、「禽獸知母、而不知父」および『禮記』三年問、「子生三年、然後免於父母之懷、夫三年之喪、天下之達喪也」をふまえる。

(37) 母には齊衰、父には斬衰、それだけですでに等差はついている、との意。

(38) 『朱子語類』巻一三七戰國漢唐諸子、「家語雖記得不純、却是當時書、孔叢子是後來白撰出」。つづいてつぎの二條がある。「家語只是王肅編古錄雜記、其書雖多疵、然非肅所作、孔叢子乃其所注之人僞作、讀其首幾章、皆法左傳句、已疑之、及讀其後序、乃謂渠好左傳、便可見」。「孔叢子鄙陋之甚、理既無足取、而詞亦不足觀、有一處載其君曰必然云云（按、論勢篇）、是何言語」。『孔叢子』については、註(33)の加賀氏著書第五章「尙書孔氏傳」の作成とその解釋」、とくにその六六七頁以下を參照。

(39) 本傳と『舊唐書』玄宗本紀。

ON YUAN XINGCHONG 元行沖 AND THE *SHI YI* 釋疑

YOSHIKAWA Tadao

Yuan Xingchong 元行沖 (653—729) was a Tang dynasty scholar during the age of Xuan Zong 玄宗. He was an intimate friend of Liu Zhiji 劉知幾, who authored the *Shi tong* 史通. One recognizes the mutual influence of these two scholars on each other in their writings. First this essay considers the *Wei dian* 魏典, a chronological history of the northern Wei dynasty authored by Yuan Xingchong, and his commentary on the *Xiaojing* 孝經. While Yuan Xingchong wrote a commentary which further amplified the notes on the *Lei li* 類禮 of Wei Zheng 魏徵 of the early Tang, which in turn had been based on the text of the *Li ji* 禮記 that was reorganized by Sun Yan 孫炎 in the Wei dynasty (220—264 A. D.), the imperial dynasty did not use his text. To vent his resentment, Yuan Xingchong wrote the *Shi yi* 釋疑. In the *Shi yi*, Yuan Xingchong severely criticized "the study of commentaries on words and phrases." By "the study of commentaries on words and phrases," Yuan Xingchong indicated a perspective like that taken by interpreters of the traditional classics, as represented by works such as the *Correct Meanings of the Five Classics*. In contrast to that learning, Yuan Xingchong selected several excellent portions out of the various interpretations, and, following them, sought to establish his own perspective on learning.

STONE INSCRIPTIONS AS HISTORICAL SOURCES FOR THE PERIOD PRIOR TO LI TAN'S 李璮 REBELLION

MORITA Kenji

This essay investigates matters relating to Li Quan 李全 and his son, Li Tan 李璮, rulers of the Shandong peninsula between 1210 and 1260, and their rule of that peninsula. It uses as its main historical source materials